様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　１ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2022
課題番号：１６Ｋ０２７１９

研究課題名（和文）鎌倉時代の真言宗系訓点資料についての日本語学的研究

研究課題名（英文）Linguistic research on kunten material of the Shingon school in Kamakura period

研究代表者
月本　雅幸（Tsukimoto, Masayuki）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・名誉教授

研究者番号：６０１４３１３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：漢文に日本語の読みを加えた訓点資料については、明治時代以来多数の研究が行われて来たが、その主眼は平安時代のものと江戸時代のものであり、鎌倉時代のものについては漢籍や国書（日本書紀など）の研究はかなりのものがあったものの、仏典については研究が極めて乏しかった。本研究課題では、これらの鎌倉時代の仏典のうち、真言宗の僧侶によって記入された訓点の日本語を精査し、それが平安時代、具体的には１１，１２世紀の伝統を忠実に継承していることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は従来十分行われていなかった鎌倉時代の漢訳仏典や日本撰述書に記入された訓点を検討することにより、これらの資料を日本語史の資料としてよりよく使用できる環境を整える意義があり、広く日本語の歴史的変遷に関する研究に資するものである。

研究成果の概要（英文）：This research was conducted on kunten materials (Japanese gloss to classical Chinese texts) written in the 13th to 14th century among the Shingon school of Buddhism. As research achievements, those materials basically preserve traditional Japanese readings since the 11th and 12th centuries. This finding is important since there have been few researches on Buddhist kunten materials written by monks of the Shingon school at that period.

研究分野：日本語学

キーワード：訓点　日本語史　漢文訓読　真言宗

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

漢文に日本語の読みを付けた「訓点資料」の日本語学的な研究は大矢透（１８５１～１９２８）に始まる。訓点資料は大きく仏典、漢籍、国書（日本撰述の漢文による典籍）に三分されるが、このうち、仏典はその現存する点数が多く、また８世紀末からの資料が存在するために、日本語史の「空白」を埋めるための資料として注目、重視され、多くの研究が行われた。主要な研究者には春日政治、大坪併治、築島裕、小林芳規らがいる。

漢籍の訓点資料については、平安時代の資料が少数しか残されておらず、このため鎌倉時代の訓点資料の研究は進捗しており、小林芳規、石塚晴通、小助川貞次らの業績がある。また、国書については平安鎌倉時代の訓点資料の研究、特に「日本書紀」を中心とした石塚晴通の研究がある。

ところが、仏典の訓点資料は極めて点数が多く、研究の対象は平安時代（９～１２世紀）の資料に集中し、鎌倉時代（１３～１４世紀前半）の資料に関する研究は極めて少ない。漢籍や国書の訓点は、平安時代のものを鎌倉時代のものがよく継承していることが知られているが、仏典も果たしてそれと同様であるかは判然としていない。

このような現状を背景として、本研究課題を企図したものである。

２．研究の目的

前項に述べた通り、本研究課題は、鎌倉時代の仏典の訓点資料とそこに記された訓点の性格について日本語学的な検討を行おうとするものである。ただし、前述の通り、仏典の訓点資料は膨大な数が伝存しており、平安時代だけで５０００点に上ると推計され、鎌倉時代のものについては、その点数の推測も極めて困難であり、仏典の訓点資料全体についてこの研究を行うことは現時点では容易ではない。

そこで、本研究課題においては、研究代表者にとって研究の蓄積があり、かつ研究の便宜、即ち資料の直接的な閲覧、調査、撮影の便宜のある真言宗系の寺院に所蔵される訓点資料に限定をして研究を行ったものである。その中でも真言宗において最重要な空海（７７４～８３５）の撰述書を中心にその訓点に記された日本語の性格について検討したものである。

３．研究の方法

本研究課題については、次のような研究方法を用いた。

(1)重要資料の選定　検討の対象となる訓点資料を各種目録類（DB はまだ構築されていない）により選んだ。

(2)訓点資料の原本調査　(1)において選定した資料を所蔵者の許諾を得て調査した。

(3)訓点資料の撮影　(2)の資料の中で、所蔵者の許諾を得たものについて、撮影を行った。

(4)訓点資料の解読　(2)や(3)の対象となった訓点資料について、解読作業を行った。

(5)訓点資料の分析・検討　(4)の作業に基づいて、対象の資料について、日本語学の観点から検討を行った。主たる検討項目は、鎌倉時代の真言宗系の訓点資料がどれほど平安時代の言語を継承しているかであった。

(6)なお、当初、研究は順調に推移していたが、(5)の作業中、2020 年春からの新型コロナ感染症感染拡大に伴い、追加の原本調査などが全て所蔵者により謝絶され、それが再開されたのは、2023 年に入ってからであり、しかもなおかなりの制限が継続している。このため、(5)については大きな支障が生じた。この間研究成果の取りまとめの精緻化のため研究期間を１年延長し、さらに新型コロナ感染症のためさらに 2 年間の延長を日本学術振興会の許可を得て行ったが、なお大きな影響があり、それが研究成果に影響したことを遺憾とする。

４．研究成果

本研究課題による研究成果は次の通りである。

(1)本研究の対象となりうる真言宗系の仏典訓点資料の総数は極めて多数に上ることが明確になったものの、それらの大部分は研究されていないことが改めて明らかになったこと。

(2)それらの訓点資料に記入された日本語は、基本的に平安時代の言語、具体的には１２世紀のそれを継承したものであることが明らかになった。しかしながら今回の研究課題において、詳細に検討したのは空海の撰述書を中心とする訓点資料であるため、宗祖の著作に対する意識から、伝統的な訓法が保持された面もあるかもしれず、これについては今後なお検討を要する可能性がある。なお、研究代表者は嘗て空海撰述書に最初に訓点を付けたのは、空海と同時代の９世紀や１０世紀の学僧ではなく、１１世紀の学僧である可能性が高く、その候補者の１人としては仁和寺の済暹(１０２０～１１１０)が挙げられることを指摘したが、この観点から見れば、その伝統は１１世紀以後のものとなろう。

(3)これに対し、鎌倉時代語の反映については、研究開始前にはある程度のものが見られるであろうと予測したが、最終的な検討の結果、それは極めて少ないと結論づけるに到った。実は、漢字に片仮名を交えた漢字片仮名交じり文においては、しばしば鎌倉時代の資料に、平安時代とは異なる性格の言語が反映していることが小林芳規らによって指摘されているが、今回検討した訓点資料については、

真言宗系の片仮名交じり文と比較しても鎌倉時代的な語彙、語法は決めて稀薄であり、これは文章類型の差に起因する可能性が高いように思われる。
(4)本研究課題の遂行の中で、予想外の新たな知見も得られた。例えば、文頭の接続詞「故」について、これを「カルガユヱニ」と読む例が鎌倉初期（１３世紀前半）の資料に複数見えることが明らかになった（高山寺蔵「即身成佛義」)。従来、このような文頭の「故」は多くの場合、「ユヱニ」と読まれたと考えられて来たが、大坪併治は嘗てその著『平安時代における訓点語の文法』において、平安時代後半にあっても、「カルガユヱニ」と解読されるべきであると主張したが、その明証は得られず、この問題は未解決であった。今回、鎌倉時代の訓点資料に「故」を明確に「カルガユヱニ」と訓じた用例が複数見出されたことは、その前の時代、つまり１１世紀、１２世紀の仏典訓点資料においても、「故」が「カルガユヱニ」と読まれた可能性を強く示唆するものとして注目される。
(5)本研究課題で精査した鎌倉時代の真言宗系訓点資料の一例として、高山寺蔵「即身成佛義」の解読文を参考として以下に記す。これは前述の(4)に関連するからでもある。

高山寺蔵即身成佛義鎌倉初期点訳文稿

・本稿は鎌倉初期の真言宗系訓点資料の実態を示すために作成したものである。

・ここで扱う資料は、高山寺蔵「即身成佛義」（空海撰）１帖（重文第４部１２７函９号）
　である。

・本書の書誌事項は次の通りである。

院政期（12 世紀末）写、粘葉装、「高山寺」朱印、押界１頁６行、朱点（仮名、喜多院点、12 世紀末)、墨点（仮名、鎌倉初期)、薄茶地原表紙、雲母引継題簽

（外題）即身義

（内題）即身成佛義　遍照金剛撰

（尾題）即身成佛義

（奥書）　　校点了

（朱書）「以或人本一交了於今書広略本不同歟其中今本首尾調
　　可依用云々」

（墨書別筆）「此書者先妣比丘尼持本也文字
　　狼藉不足亀鏡矣　玄朝記之」

・これで分かるように、本書には２種の訓点が記入されている。つまり、院政期の朱点と鎌倉初期 13 世紀前半の墨点である。朱点と墨点は訓読の上で重なるところがなく、別個にそれぞれ別人の手により記入されたものと見られる。本稿では鎌倉初期の墨点のみ　を取り上げ、それを解読して訳文の形式で示す。なお、今回は全体の約半分、前半について公表するものである。

・訳文の凡例は次の通りである。

○訳文凡例

・原文にある墨点（墨書の仮名）を片仮名で示す。

・稿者による補読は（　）に平仮名を入れて示す。

・原文には句読点がないので、適宜「、」で補った。

・丁の冒頭は「(一オ)」のように示し、行の冒頭は▲で示した。

・原文の返点は訳文には示さない。

・原文の小字二行割りの部分は《　》に入れて示した。

・注記すべき事項は＊を付して各丁の末尾に記した。

・原文の梵字はローマ字で示したが、種々の記号は省略した。

・偈の部分は訳文に適宜空白を置いた。

（表紙）

（外題）即身義
（右上）「真十五」
（表紙見返）［「大日経第五」ノ引用アリ、省略］
「（一オ）▲即身成佛義　　遍照金剛撰

▲問（ひ）テ曰ク、諸經論ノ中ニ皆三劫ノ成佛ヲ説ク、今即身成佛ノ義ヲ建立（す）ル、何ノ憑（ヘウコ）據カ▲有リヤ、答（ふ）、祕密藏（の）中ニ如來是（の）如（く）説（き）タマフ、

問（ふ）、彼（の）經（に）云何（イカン）カ▲説ク、答（ふ）、金剛頂經ニ説カク、此（の）三昧（を）修（す）ル者（も）ノハ現ニ佛ノ菩▲提（を）證ス、《此（の）三昧ト（いふ）者（ハ）謂（く）大日尊ノ一字頂輪王（の）三摩地（なり）［也］》

▲又云（はく）、若（し）衆生有（りて）此（の）教ニ遇（ア）フテ　　晝夜四時ニ精進（し）テ修（す）レ（は）
「（一ウ）▲現世ニ歡喜地ヲ證得シテ　　後ノ十六生ニ正覺ヲ成ス《▲謂（く）此（の）教ト（いふ）者（ハ）。法佛ノ自内證ノ三摩地大教王ヲ指（サ）ス、歡喜地ト（いふ）者（ハ）、顯教ノ所説ノ初地ニハ非ス、是（れ）則（ち）自宗（の）佛乘之初地（なり）、＊具（ツフ）サニ説カムコト地位品ノ中ノ十六生ト（いふ）者（ハ）、十六大菩薩生ヲ指（すか）如（し）、具（さに）ハ如地位品ノ説（なり）［也］》
▲又云（く）。若（し）能（く）此（の）勝義ニ依（りて）修（すれ）ハ　　現世ニ無上覺ヲ成（す）コトヲ得▲又云（く）、當（に）知（る）（再読）［當］（し）、自身即（ち）金剛界ト爲（ス）應（し）、自身金剛ト爲レハ、堅（ケン）實ニシテ傾（クキヤウヱ）壞無シ。▲□（我）（れ）金剛ノ身ト爲（る）。大日經（に）云（く）［於］此（の）身ヲ捨（ス）テ

（注）具（ツフ）サニ説カムコト―左傍訓ナリ。「具説」ノ二字ノ右傍ニ傍訓アリ、擦消ス。

「（二オ）▲不シテ、神境通ヲ得ルニ逮（ヲヨ）ヘリ、大空ノ位（に）遊歩シテ、［而］身祕密ヲ成ス、▲又云（ク）。此（の）生ニ於（て）悉地ニ入ラムト欲ハヽ　　其（の）所應ニ隨（ひ）テ之ヲ。思念セヨ　　▲親（マノアタ）リニ［於］尊ノ所（ミモト）ニシテ明法ヲ受ク、　　觀察シ相應シテ成就ヲ作スト云云　　▲此（の）經ニ説（く）所（の）悉地ト（いふ）者、持明ノ悉地（と）［及］法佛ノ悉地ヲ明ス、大空位ト（いふ）▲者、法身ハ大虚（キヨ）ニ同（しく）シテ［而］无礙ナリ、衆象（を）含（カム）シテ［而］常恒ナルカ故ニ大空ト曰フ、▲諸法（の）［之］依住する所ナルカ故ニ位ト号ス、身祕密ト（いふ）者、法佛ノ三密（なり）、等覺モ見（る）コト

「(二ウ)▲難(カタ)ク、十地モ何(イカ)ンカ窺(ウカ)ヽハム、　故(かる)(カユヘ)　ニ身祕密ト名(く)、　又龍猛菩薩(の)

菩▲提心論ニ説カク　眞言法ノ中ノ＊□即身成佛（な）ルカ故ニ、是(コヽ)ニ三▲摩地ノ法ヲ説ク。

諸教（の）中ニ於（て）闕（け）テ［而］書（さ）不《是（に）説（かく）、三摩地ト（いふ）者、法身自證ノ三摩地（なり）、諸教ト（いふ）者▲他受用身ノ所説ノ諸ノ顯教（なり）［也］》　又云（く）。

▲若（し）　人(ひ)ト　佛恵ヲ求（め）テ。菩提心ヲ通達スルニ、父母所生ノ身ニ大覺ノ位ヲ速證ス、是（の）如（き）等ノ教理證文ニ▲依（りて）此（の）義ヲ成立ス、是（の）如（き）經論ノ字義差「(三オ)

▲別云何（に）、頌（に）曰（く）▲六大無礙ニシテ常瑜伽ナリ《體》　四種曼荼各(ヲノヽ)ヽ離（せ）不《相》

▲三密加持速疾ニ顯（す）《用》　重々（に）帝網ノコトクナルヲ（もて）即身ト名（く）《无礙諸佛》

▲法然ニ薩婆若ヲ具足シテ《法佛成佛》　心數心王刹塵（に）過(ス)キタリ《＊無數》　▲各（の）五智無際(サイ)智ヲ具シテ《輪円》　円鏡＊刃（の）故ニ實覺智ナリ《此（の）四句（を）申（ふる）所、成佛（の）二字（を）明（す）》▲釋ニ曰（く）、此（の）二頌八句ヲ以テ即身成佛ノ四字ヲ歎ス、即（ち）是（の）四字ニ

（注）□一仮名一字アリ、虫損。

無一某字ヲ擦消シテ重書ス。

刃一「力」ノ誤写カ。

「(三ウ）▲無邊ノ義ヲ含(カム)セリ、一切（の）佛法ハ此（の）一句ヲ出（て）不、

(かるかゆ)へ故　ニ略（し）テ兩(リヤウ)頌ヲ樹(タ)□テ無邊ノ▲徳ヲ顯ス。頌ノ文ヲ二ニ分チ、初（めの）一頌ニハ即身ノ二字ヲ歎シ、次（の）一頌ハ成佛ノ兩▲字ヲ歎ス。初中ニ又四アリ。初一句ハ體、二ハ相、三ハ用、四ハ無礙ナリ、後ノ頌ノ中ニ▲四有リ、初ニハ法佛ノ成佛ヲ擧ケ、次には无數ヲ表（し）、三（には）輪円ヲ顯シ、後ニハ所由ヲ出ス、▲六大ト謂（ふ）者五大（と）［及］識（なり）、大日經ニ謂(イ)フ所ノ我（れ）本不生ヲ覺レリ、▲語言ノ道ヲ出過シ、諸過ニ解脱ヲ得テ［於］因縁ヲ遠離シ、空ハ虚□（空）ニ等(ヒト)シ（と）知(シ)ル、

「（四オ）▲是（れ）其（の）義（なり）［也］。彼（の）種子（の）眞言ニ曰ク《buddhabodhiavirahumkhamhum》、爲(イ)ハクa阿□（字）（は）▲諸法本不生（の）義ト（いふ）者即（ち）是（れ）地大（なり）、嚩(ハ)字（は）離言（の）説、之ヲ▲水大ト謂(イ)フ、（以下略）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 月本雅幸	４．巻 令和３年度
２．論文標題 高山寺蔵本大毘盧遮那成仏経疏巻第十五康和点訳文稿（十七）	５．発行年 2022年
３．雑誌名 高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集	６．最初と最後の頁 65-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 月本雅幸	４．巻 令和２年度
２．論文標題 高山寺蔵本大毘盧遮那成仏経疏巻第十五康和点訳文稿（十六）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集	６．最初と最後の頁 22-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 月本雅幸	４．巻 146
２．論文標題 訓点資料研究に期待すること　訓点資料研究の再興のために	５．発行年 2021年
３．雑誌名 訓点語と訓点資料	６．最初と最後の頁 129-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 月本,雅幸	４．巻 なし
２．論文標題 高山寺蔵空海撰述書の古写本・古刊本について	５．発行年 2020年
３．雑誌名 高山寺経蔵の形成と伝承	６．最初と最後の頁 33-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 月本雅幸	4．巻 ー
2．論文標題 高山寺蔵本大毘盧遮那経疏巻第十五康和点訳文稿（十四）	5．発行年 2018年
3．雑誌名 平成二十九年度高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集	6．最初と最後の頁 91-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 月本雅幸	4．巻 -
2．論文標題 高山寺蔵本大毘盧遮那経疏巻第十五康和点訳文稿（十三）	5．発行年 2017年
3．雑誌名 平成二十八年度高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集	6．最初と最後の頁 119-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 月本雅幸	4．巻 28
2．論文標題 日本の仏書訓点資料研究の最先端	5．発行年 2017年
3．雑誌名 口訣研究	6．最初と最後の頁 27-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　2件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 柳原恵津子、近藤明日子、高田智和、月本雅幸
2．発表標題 訓点資料訓読文コーパス作成の意義・手法・そして課題
3．学会等名 国立国語研究所「通時コーパス」シンポジウム2022
4．発表年 2022年

１．発表者名 月本雅幸
２．発表標題 「平安時代訓点資料ユニオンカタログ」編纂の構想
３．学会等名 訓点語学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 月本雅幸
２．発表標題 日本の訓点資料とその価値
３．学会等名 中国・浙江大学人文学院（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 月本雅幸
２．発表標題 日本の仏書訓点資料の最先端
３．学会等名 口訣学会（韓国）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関